

# 預言者の社会的告発

—社会史的考察—

## 樋 口 進

紀元前 8 世紀の預言者たちは（特にアモス、イザヤ、ミカ）、当時の社会において、支配者階級が弱者を虐げている現実を激しく非難している。当時の社会は、どのような状態であったのであろうか。なぜ、そして何に基づいて、彼らはそのような現実を激しく非難したのであろうか。

### 1. アモスの社会的告発

#### 1.1. アモスの時代の社会史的状況

アモスが活動した紀元前 8 世紀の中頃の北イスラエルは、ヤロブアム II 世の時代（前 787-747 年）であり、この頃イスラエルは平和と繁栄を享受していた。ヤロブアム II 世は、領土的にもかつてのダビデ・ソロモン時代を彷彿とさせる広さを回復していたようである。列王記下 14 章 15 節には「しかし、イスラエルの神、主が、ガト・ヘフェル出身のその僕、預言者、アミタイの子ヨナを通して告げられた言葉のとおり、彼はレボ・ハマトからアラバの海までイスラエルの領域を回復した。」とある<sup>1</sup>。

しかしこのような繁栄は、支配者階級によって農民階級が搾取されたことに

---

1 この「彼」は、ヤロブアム II 世のことである。「レボ・ハマト」は、ソロモンの領土の北端とされた地名であるが（王上 8:65）、正確な場所は分らない。おそらく、ダマスコから約 70 キロ北の、レバノン山とアンチレバノン山の狭間の北端に位置し、ユーフラテス河地域への入り口になる町のことであろう。「アラバの海」は死海のことである（雨宮慧「列王記下」、『新共同訳旧約聖書注解 I』日本基督教団出版局、1996 年、650-651 ページ参照）。「レボ・ハマトからアラバの海まで」で、イスラエルの最大の領土を表した（アモ 6:14 参照）。

よって成り立っていたのである。この時代、カナン人の商人たちがイスラエル古来の土地法を無視して、部族連合時代から大切にしてきた嗣業の土地(נַחֲלָה)を農民階級から巧みに取り上げ、大土地所有を拡大していたのである。列王記上 21 章において、当時の北イスラエルの王アハブが王妃イゼベルの協力によって農民のナボトから巧みに土地を取り上げた記事があるが、同じようなことが支配者階級によって行われていたことが推測される。土地を取り上げられ、貧しくなった農民が借金を返せない場合、支配者階級は彼らを簡単に債務奴隷としてこき使ったようである。このような状況にあって、アモスは神から遣わされた預言者として、支配者階級を痛烈に非難した。

## 1.2. アモスの告発

アモスは、とりわけ「弱い者(דָּל)」や「貧しい者(אֲבִיּוֹן)」を虐げる富める支配者階級を痛烈に非難した。2 章 6 節では、「主はこう言われる。イスラエルの三つの罪、四つの罪のゆえに／わたしは決して赦さない。彼らが正しい者を金で／貧しい者を靴一足の値で売ったからだ。」と告発されている。ここでアモスは、貧しい者がわずかな借金のために支配者階級によって債務奴隷に転落させられていた実態を非難しているのである。

また 8 章 4 節では、「このことを聞け。貧しい者を踏みつけ／苦しむ農民を押さえつける者たちよ。」と告発されている。ここの「踏みつける(שָׁפַף)」とか「押さえつける(שָׁבַת)」という言葉は、支配者階級による残酷な農民搾取の表現である<sup>2</sup>。

また 2 章 8 節では「祭壇のあるところではどこでも／その傍らに質にとった衣を広げ／科料として取り立てたぶどう酒を／神殿の中で飲んでい。」と言われているが、ここには支配者階級が「契約の書」にあるようなイスラエルの古来の法を無視していた実態が告発されている。出エジプト記 22 章 25 節には、貧しい者から質にとった衣は、日没までに返さなければならないことが規

2 林相國「アモスにおける社会批判と『契約の書』」、金井美彦、月本昭男、山我哲雄編『古代イスラエル預言者の思想的世界』新教出版社、1993 年、142 ページ参照。

定されている。E. ヴェルトヴァインは、アモスが基準にしたのは契約の書（出 20:22-23:19）にあるようなイスラエルの法であった、と言う<sup>3</sup>。

また、8 章 5-6 節では、「お前たちは言う。『新月祭はいつ終わるのか、穀物を売りたいものだ。安息日はいつ終わるのか、麦を売り尽くしたいものだ。エファ升は小さくし、分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかそう。弱い者を金で、貧しい者を靴一足の値で買い取ろう。また、くず麦を売ろう。』」とある。秤をごまかすことは、古来の法において禁じられていたが、カナン人の（カナン化された）商人たちはこれを無視し、不正な商売をしてばろもうけをしていたのである。レビ記 19 章 36 節（神聖法集）には、「正しい天秤、正しい重り、正しい升、正しい容器を用いなさい。わたしは、あなたたちをエジプトの国から導き出したあなたたちの神、主である。」と厳粛に命じられている（申 25:13-16 参照）<sup>4</sup>。

また、5 章 12 節では、「お前たちの咎がどれほど多いか／その罪がどれほど重いのか、わたしは知っている。お前たちは正しい者に敵対し、賄賂を取り／町の門で貧しい者の訴えを退けている。」と言われている。支配者階級が契約の書や神聖法集などにあるイスラエルの古来の法に違反して農民階級を虐げている実態に対して農民たちが裁判所（町の門）に訴えても、裁判官は支配者階級より賄賂を受け取っていたために、厳正な裁判を規定していた法を無視していたのである。「契約の書」（出 23:8a）では、「あなたは賄賂を取ってはならない。」と規定されている。

また、5 章 21-23 節には、「わたしはお前たちの祭りを憎み、退ける。祭りの献げ物の香りも喜ばない。たとえ、焼き尽くす献げ物をわたしにささげても／穀物の献げ物をささげても／わたしは受け入れず／肥えた動物の献げ物も顧みない。お前たちの騒がしい歌をわたしから遠ざけよ。豎琴の音もわたしは聞

3 E. Würtwein, Amos-Studien, ZAW 62 (1949/50), S. 48.

4 「神聖法集」においては、しばしば法の後ろに「わたしはあなたの神、主である」という「自己紹介定式」が置かれている。この定式は十戒にも言われており（出 20:2）、シナイ契約に基づくもので、主によって契約の相手である「イスラエルの民」に厳粛に与えられた法が意図されている（樋口進「レビ記」、『新共同訳旧約聖書略解』参照）。

かない。」とある。サマリアやベテルで行われていた当時の礼拝は、カナン化の影響を受け、豪華な献げ物を献げ、騒がしい音楽の演奏されたもので、貧しい農民から不正な手段で得た利益で豪華な礼拝を捧げても主は喜ばない、とアモスは痛烈に批判した。

紀元前 8 世紀のイスラエルは、政治の支配者も宗教の支配者も法廷の指導者もカナン化の影響を受けていた。そのような中で、部族連合時代以来のヤハウエ宗教はバアル宗教と混交し（これについては特にホセアが批判した）、経済的には貧富の差が拡大し、法的不正がはびこった。とりわけ、部族連合時代から嗣業の土地（נַחֲלָה）を大切にしてきた農民階級が虐げられていった。アモス書の中にしばしば登場する「貧しい者（אֲבִיּוֹן）」（2:6, 4:1, 5:12, 8:4, 6）、「弱い者（לֵוִי）」（2:7, 4:1, 5:11, 5:4, 6）、「悩む者（עָנָו）」（2:7, 8:4）という言葉は、ヤロブアム II 世の時代の支配者階級によって搾取された貧困層を表す社会的用語である<sup>5</sup>。

アモスは特に、サマリアの裕福な上層階級に「災いだ（הוֹי）」の叫びを発した（5:18, 6:1）。H. W. ヴォルフは、この様式（Wehe-Ruf）は部族の教育の場に由来する、と言う<sup>6</sup>。3 章 9-10 節には、「アシュドドの城郭に向かって／エジプトの地にある城郭に向かって告げよ。サマリアの山に集まり／そこに起こっている狂乱と圧政を見よ。彼らは正しくふるまうことを知らない／主は言われる。彼らは不法と乱暴を城郭に積み重ねている。」とあるが、H. ドンナーは、ここで非難されているのは、サマリアのカナン人の役人である、と言う<sup>7</sup>。彼らは、「狂乱（מְהוּמָה）」、「圧政（עֲשׂוּקִים）」、「不法（חֲמָס）」<sup>8</sup>、「乱暴（שָׂדֶה）」という暴力的手段で自分たちの財産を拡大したとアモスは批判した。また、4 章 1 節には、「この言葉を聞け。サマリアの山にいるバシヤンの雌牛どもよ。

5 林相國、前掲書、135 ページ参照。

6 H. W. Wolff (Tr. by Foster R. McCurley), *Amos the Prophet. The Man and His Background*, Philadelphia: Fortress Press, 1973, p. 17-33.

7 H. Donner, Die soziale Botschaft der Propheten im Licht der Gesellschaftsordnung in Israel, *Oriens Antiquus* 2 (1963), S. 236.

8 新共同訳では「不法」と訳されているが、「暴虐」の方がいいであろう（岩波訳参照）。

弱い者を圧迫し、貧しい者を虐げる女たちよ。『酒を持ってきなさい。一緒に飲もう』と／夫に向かって言う者らよ。』とあるが、アモスはサマリアの上層階級が地方の農民から富を吸い上げ、贅沢な暮らしをしていた実態を非難した。また彼らは、「冬の家」と「夏の家」、また「象牙の家」(3:15) や「切石の家」(5:11) といった非常に贅沢な家を所有していた実態が非難されている。

## 2. イザヤの社会的告発

### 2.1. イザヤの時代の社会史的状況

イザヤの活動した紀元前 8 世紀の後半は、南ユダもウジヤ王（前 787-736 年）の繁栄した時代も終わり、アッシリア帝国がシリア・パレスチナに勢力を伸ばし、北イスラエルが滅ぼされ（前 722 年）、南ユダもたびたび攻撃を受けた危機の時代であった。紀元前 745-727 年にアッシリアを支配したティグラト・ピレセル III 世の目標の 1 つは、シリア・パレスチナを征服することであった<sup>9</sup>。彼は、紀元前 733 年に反アッシリア同盟を結んでいたアラムと北イスラエルを攻撃した。この時、首都ダマスコは陥落し、アラムはアッシリア帝国の属州に併合された。北イスラエルは、滅亡は免れたものの東ヨルダンのギレアド、北のガリラヤやイズレエル平原など肥沃な領土をすべて失い、サマリア周辺の山地のみを残す小国になった。H. ニールは、この時カナン人の上層階級が大量に北イスラエルから南ユダに流れ込んできた、と言う<sup>10</sup>。さらに彼は、前 722 年に北イスラエルがアッシリア帝国によって滅ぼされたときも、ヒゼキヤ王の時代にカナンの商人の多くがまだ滅ぼされていなかった南ユダに逃亡し、自分たちの資本を元手に農民から家や土地を取得したため、ユダの農民はますます貧しくなっていった、と言う。王国移行時期から始まっていた貧富の差がイザヤの活動した混乱の時期にますます拡大していったのである。そのような状況

9 M. ノート『イスラエル史』樋口進訳、日本基督教団出版局、1983 年、324-325 ページ参照。

10 Herbert Nier, Bedeutung und Funktion kanaänischer Traditionselemente in der Sozialkritik Jesajas, BZ 28 (1984), S. 76.

の中で、イザヤは貧しくされていった農民階級を擁護し、虐げていた上層階級を告発したのである。

## 2.2. イザヤの告発

イザヤもアモス同様弱いものを虐げる支配者階級を痛烈に非難した。K. コッホによると、アモスは北イスラエルから南ユダに追放され（アモ 7:10）、イザヤが預言者として召命を受ける数年前にユダに戻ってきたと思われるから、イザヤはアモスによって決定的に影響を受けたであろう、と言うが<sup>11</sup>、それは大いに考えられる。

1 章 23 節には、「支配者らは無慈悲で、盗人の仲間となり／皆、賄賂を喜び、贈り物を強要する。孤児の権利は守られず／やもめの訴えは取り上げられない。」とある。ここでは、エルサレムの「支配者（שָׂרִים）」が不正な手段によって貧しいものから搾取していた現実が非難されている（3:14-15 も）。「孤児」や「やもめ」は、弱い立場の代表であり、「契約の書」などの古い法では保護すべき人々とされていた（出 22:21, 申 24:17）。エルサレムの支配者（＝役人）は、本来「公平（מִשְׁפָּט）」と「正義（צֶדֶק）」をもって、弱い立場の者の権利を守るべきであったが、今やイスラエルの古い法秩序は無視された、とイザヤは非難する（1:21）。そしてイザヤは、そのようなエルサレムの支配者を「ソドムの支配者」と呼ぶ（1:10）<sup>12</sup>。

11 K. コッホ『預言者Ⅰ』荒井章三、木幡藤子訳、教文館、1990 年、228 ページ。

12 「ソドムの罪」は、英語の *sodomy* の語源からも分かるように一般に「男色」と考えられてきた（『新共同訳旧約聖書注解Ⅰ』参照）。しかし、創世記 19 章 5 節の「知る（יָדָע）」は、必ずしも性行為のことではなく（新共同訳では「なぶりものにしてやる」と訳されている）、弱者への虐げのことだと考えられる。中世のヨーロッパ社会においてマイノリティである同性愛者を排除するために意図的に「男色」と解釈されたのであろう（ジョン・ボズウェル『キリスト教と同性愛——1～14 世紀西洋のゲイ・ピープル』大越愛子、下田立行訳、国文社、1990 年参照）。旧約聖書にソドムの罪を非難する箇所はたくさんあるが（申 29:23, 32:32, イザ 3:9, 13:19, エレ 23:14, 49:18, 50:40, 哀 4:6, エゼ 16:49）、それが同性愛と解釈されている箇所は 1 つもない。エゼキエル書 16 章 49 節には「お前の妹ソドムの罪はこれである。彼女とその娘たちは高慢で、食物に飽き安閑と暮らしていながら、貧しい者、乏しい者を助けようとしなかった。」とある。ここでの解釈は、明らかに弱者への虐げである。イザヤがエルサレムの支配者を「ソドムの支配

また、5章8節には、「災いだ、家に家を連れ、畑に畑を加える者は。お前たちは余地を残さぬまでに／この地を独り占めにしている。」とある。ここでイザヤは、アモス同様(5:18, 6:1)、農民を虐げる富裕層に「災いだの叫び(Wehe-Ruf)」を発する<sup>13</sup>。この背後には、H. ニールの指摘するように<sup>14</sup>、北イスラエルがアッシリアの攻撃を受けたときに南ユダに移住してきた富裕なカナン人によって部族連合時代以来の嗣業の土地(הַנְּחֻלָּה)が巧みに取り上げられ、農奴化されていった農民の現実があるであろう。

さらにイザヤ書5章22-23節には、「災いだ、酒を飲むことにかけては勇者／強い酒を調合することにかけては／豪傑である者は。これらの者は賄賂を取って悪人を弁護し／正しい人の正しさを退ける。」とある。ここでは、やはり「災いだの言葉」に導入されて、弱者を虐げる上層階級が非難されている。H. ドンナーは、ここで非難されているのは役人(שָׂרִים)である、と言う<sup>15</sup>。彼らはカナン化の影響を受け、無慈悲で盗人の仲間になり、みな賄賂を喜び、贈り物を強要していた。ここで「正しい人(צַדִּיק)」と言われているのは、嗣業の土地を受け継いできた農民である。彼らは、支配者階級によって嗣業の土地を巧みに取り上げられ、それを役人に訴えても、彼らは賄賂を取っていたので、その訴えを聞き入れてくれない実態をイザヤは非難しているのである(10:1-2 も参照)。

また、9章9節には、「れんがが崩れるなら、切り石で家を築き／桑の木が倒されるなら、杉を代わりにしよう。」とあるが、支配者階級は不正に取り立てた利益によって豪華な家を次々と建てていたというのである。

また、10章1-2節には、「災いだ、偽りの判決を下す者／労苦を負わせる宣告文を記す者は。彼らは弱い者の訴えを退け／わたしの民の貧しい者から権利を奪い／やもめを餌食とし、みなしごを略奪する。」とある。F. クリュージェマンは、ここで言及されている人々は、富める者たちであり、弱者を虐げて利益者」として非難したのも同じ意図であろう。

13 注(6) 参照。

14 注(10) 参照。

15 H. Donner, *ibid.*, S. 237.

を得ていた人々である、と言う<sup>16</sup>。

また、29 章 21 節には、「彼らは言葉をもって人を罪に定め／町の門で弁護する者を罫にかけ／正しい者を不当に押しのける。」とある。ここでは、上層階級の不正が非難されている。

### 3. 他の預言者の社会的告発

#### 3.1. ミカの社会的告発

ミカは、イザヤとほぼ同じ時代に、すなわち紀元前 8 世紀の後半に活動した。ただし、イザヤは都会のエルサレムで活動したのに対し、ミカはエルサレムの南西約 34 km の田舎町モレシエト・ガトで活動した（ミカ 1:14）。J. プレンキンソップによると、彼は小農民の権利の熱心な擁護者であり、古い秩序を解体し、独立農民をその土地から追い出していたエルサレムの支配者階級を告発したと言う<sup>17</sup>。さらにハンス・ヴァルター・ヴォルフは、ミカは土地を所有し、エルサレムの権威者に対して自分の地域の人々の訴えを取り上げたモレシエトの長老たちの一人であった、と主張した<sup>18</sup>。

2 章 1-2 節には、「災いだ、寢床の上で悪をたくらみ／悪事を謀る者は。夜明けとともに、彼らはそれを行う。力をその手に持っているからだ。彼らは貪欲に畑を奪い、家々を取り上げる。住人から家を、人々から嗣業を強奪する。」とある。ミカも、アモスやイザヤと同様に「災いだの言葉（Wehe-Ruf）」の導入句でもってエルサレムの支配層を告発する。ミカは、ユダの地方に住み、エルサレムの支配層が地方の農民を農奴化し、大農園を経営し、イスラエルの古くからの土地法（ナハラー）を無視していたことを非難したのである。

また、3 章 3 節には、「彼らはわが民の肉を食らい／皮をはぎ取り、骨を解

16 F. Crüsemann, *Die Tora: Theologie und Sozialgeschichte des alttestamentlichen Gesetzes*, München: Kaiser Verlag, 1992, S. 31-32.

17 J. プレンキンソップ『旧約預言の歴史』樋口進訳、教文館、1997 年、139 ページ。

18 Hans Walter Wolff (Tr. by G. Stansell), *Micah. A Commentary*. (Continental Commentaries), Minneapolis: Augsburg, 1990.



体して／鍋の中身のように、釜の中の肉のように砕く。」とある。ここでは比喩的な表現を用いて、エルサレムの支配層が地方の農民をいかに虐げていたかを厳しく告発している。H. ドンナーは、ミカの非難は、カナン人のあるいはカナン化された上層の役人に対して向けられ、法生活と土地関係の古い秩序への彼らの介入に対して向けられた、と言う<sup>19</sup>。

さらに、6章11節には、「わたしは認めえようか／不正な天秤、偽りの重り石の袋を。」とある。ミカもアモス同様（8:5）、カナン人の商人が秤をごまかしてぼろもうけしていた現実を非難した。このようなことは、イスラエルの古い法では禁じられていた（レビ 19:36 参照）。

### 3.2. ホセアの社会的告発

J. プレンキンソップは、ホセアの関心はもっぱら偽りの礼拝（「淫行」）にあったので、アモスと違って、社会正義や不利な立場の人々の市民権については、あまり述べられていない、と言う<sup>20</sup>。そして、アモスにとって公義（מִשְׁפָּט）と正義（צְדָקָה）が鍵語であるとするならば、ホセアはむしろ忠実（חֶסֶד）や神認識（יְהוָה אֱלֹהֵינוּ）について語った、と言う。ホセアが告発したのは、バアル宗教との宗教混交の礼拝であったが、これはカナン化と密接な関係にあった。カナン化によって、宗教的にはヤハウエとバアルとの混交が広く行われ、経済的には支配者層による利潤追求のため貧富の格差が拡大したのである。

ホセアは社会的告発を全く行わなかったのではない。12章8-9節には「商人は欺きの秤を手にし、搾取を愛する。エフライムは言う。『わたしは豊かになり、富を得た。この財産がすべて罪と悪とで積み上げられたとは／だれも気づくまい。』」とある。ここでは、カナン人の商人が秤をごまかしてぼろもうけをしていた実態が非難されている。

19 H. Donner, *ibid.*, S. 241.

20 J. プレンキンソップ、前掲書、118 ページ。

### 3.3. エレミヤの社会的告発

エレミヤもホセア同様、主に宗教的な罪を非難し、ホセアの伝承を受けてそれを「姦淫」と表現した (3:6-10 参照)。しかし、エレミヤもあまり多くはないが、社会的告発も行っている。5 章 26-28 節には、「わが民の中には逆らう者がいる。網を張り／鳥を捕る者のように、潜んでうかがい／罾を仕掛け、人を捕らえる。籠を鳥で満たすように／彼らは欺き取った物で家を満たす。こうして、彼らは強大になり富を蓄える。彼らは太って、色つやもよく／その悪事には限りがない。みなしごの訴えを取り上げず、助けもせず／貧しい者を正しく裁くこともしない。」とある。ここでは、支配階級が不正な手段（「網を張り」「罾を仕掛け」は巧妙な策略を意味する）でもって弱い立場の者（「みなしご」は弱い立場の代表）から搾取し、富を築いていた実態が非難されている。ただし、ここの支配者階級はカナン人ではなさそうである。エレミヤが召命を受けたのは、ヨシヤ王の治世の第 13 年（前 627 年）であった。ヨシヤは、前王アモンが暗殺されたときに、まだ 8 歳であったが「国の民（アム・ハーアレツ）」によって王に立てられた（王下 21:24）。この国の民は、部族連合時代以来のイスラエルの伝統を重んじるヤハウェ主義者であった。そこで彼らは、ヨシヤにヤハウェ主義の教育をしたと思われる。ヨシヤは成人したときに（治世の第 18 年、前 622 年）、神殿から発見された「律法の書」に基づいて、いわゆる「宗教改革」を断行したが、これの主な目的は国内よりすべての偶像を取り除くことと祭儀をエルサレムに集中することであった（王下 22-23 章）。これにはカナン化の影響を受けていた支配者階級や商人階級は大きな痛手を受けたであろう。J. プレンキンソップは、エレミヤがこの改革を支持したと見なすことのできる彼の詞はない、と言う<sup>21</sup>。ただ、彼がこの改革を支持しなかったとは考えるにくい。なぜなら、彼もこの改革の内容と同じく偶像礼拝に対しては痛烈に非難しているし、この改革の犠牲になった郷里アナトトの親族に憎まれているからである（11:21 参照）。また、この改革を担った書記官シャファンの家族と

21 J. プレンキンソップ、前掲書、175 ページ参照。

エレミヤは親密な関係にあったことから、エレミヤがこの改革を支持したことが推測される<sup>22</sup>。

22 章 13-17 節には、次のようにある。「災いだ、恵みの業を行わず自分の宮殿を／正義を行わずに高殿を建て／同胞をただで働かせ／賃金を払わない者は。彼は言う。『自分のために広い宮殿を建て／大きな高殿を造ろう』と。彼は窓を大きく開け／レバノン杉で覆い、朱色に塗り上げる。あなたは、レバノン杉を多く得れば／立派な王だと思うのか。あなたの父は、質素な生活をし／正義と恵みの業を行ったではないか。そのころ、彼には幸いがあった。彼は貧しい人、乏しい人の訴えを裁き／そのころ、人々は幸いであった。こうすることこそ／わたしを知ることはないか、と主は言われる。あなたの目も心も不当な利益を追い求め／無実の人の血を流し、虐げと圧制を行っている。」ここで非難されているのは、ヨシヤの死後エジプトのファラオ・ネコによって王位に即けられたヨヤキムである。ここでは、理想的な政治を行った（「正義と恵みの業を行った」）前王ヨシヤと比較して、弱者を虐げるヨヤキムが非難されている。ここからカナン人の指導者層が勢いを盛り返したことが推測される。

さらにエレミヤは、22 章 3 節において、「主はこう言われる。正義と恵みの業を行い、搾取されている者を虐げる者の手から救え。寄留の外国人、孤児、寡婦を苦しめ、虐げてはならない。またこの地で、無実の人の血を流してはならない。」と言う。エレミヤも、とりわけヨヤキム時代に復活した弱者を虐げて富を蓄積するカナン化された指導者層を非難した。

### 3.4. エゼキエルの社会的告発

エゼキエルは、第 1 回捕囚の時に（前 598 年）ヨヤキン王と共にバビロンに

---

22 シャファンの息子のアヒカムは、エレミヤが裁判にかけられたとき、彼を保護した (26:24)。シャファンのもうひとりの息子エルアサは、エレミヤの手紙をバビロニアのディアスポラに運んだ (29:3)。またもう一人の息子ゲマルヤは、神殿の門の家に 1 つの部屋を持っており、バルクはそこでエレミヤの預言を記した巻物を読んだ (36:10)。そして彼は、その巻物を燃やさないようにとヨヤキム王に懇願した (36:25)。また、シャファンの孫のゲダルヤは、エルサレム陥落後に州の総督とされ、エレミヤの保護者と定められた (39-41 章)。

移され、捕囚の地で預言活動をした。

22 章 7 節には、「父と母はお前の中で軽んじられ、お前の中に住む他国人は虐げられ、孤児や寡婦はお前の中で苦しめられている。」とある。これは、滅亡直前のユダ王国の指導者層が弱者を虐げていた実態をエゼキエルが非難したものである。

## 4. イスラエルにおける階層分化の社会史

### 4.1. 王国前（部族連合時代）

ヴィリー・ショットロフは、王国前の部族連合時代の制度は、氏族民主制であって、原則として平等で自由な村在住の構成員によって担われてきた、と言う<sup>23</sup>。そして、その土地所有の特徴は、個々の氏族と家庭（民 26:52-56, 33:54）にできるだけ平等に配分された譲渡不能な相続地（ナハラー）の観念であって（レビ 25:23）、それは相続の場合だけ譲渡することができた、と言う。これは、マックス・ウェーバーの言う「誓約共同体」の理念であった<sup>24</sup>。

そもそも部族連合は、シケムにおける契約を基本にしたと考えられる。この「シケム契約」は、諸部族がヤハウエを共通の神として礼拝し、ヤハウエによって与えられた「契約の書」などの法を守ることが共通の義務であったと考えられる（ヨシュ 24 章）。そこで、この法に基づいて裁きをなした士師（ショーフエート＝裁き人）が重要な働きを担ったであろう。「契約の書」には、弱者を保護する法も含まれていた（出 22:20-26）。部族連合時代は、権力者もなく、国家の制度もなかったので、基本的に社会層の分化もなく、支配者層による弱者への虐げもなかったと考えられる。

23 ヴィリー・ショットロフ「預言者アモス——社会史的な面からその登場を評価する試み——」、『いと小さきものの神——社会史的聖書解釈』柏井宣夫訳、新教出版社、1981 年、79 ページ。

24 マックス・ウェーバー『古代ユダヤ教 I』内田芳明訳、みすず書房、1962 年、第 1 章「イスラエル誓約共同体とヤハウエ」参照。

## 4.2. ダビデ・ソロモン時代

ヴァルター・ディートリヒは、ダビデの大王国をカナン人との「融合」、ソロモンの支配をカナン人との「協同」と特徴づけた<sup>25</sup>。ダビデが大王国を建設したとき、カナン人の都市国家をも支配下に置いた。しかし彼は、カナン人を滅ぼしたのではない。むしろ彼は、王国の建設や、軍隊の編成や、経済的、社会的施策において、すでにそのような国家制度が完備していたカナンに範を仰いだのであった。またダビデの宮廷に経験豊かなカナン人の役人も登用したようである。とりわけ大祭司の職に古くからのイスラエルの祭司の家系に連なるアビアタルと共にカナン人の一部であったエブス人の血を引くツァドクを任命したのである（サム下 8:17）。さらにダビデの王位継承の際に、アビアタルはアドニヤを支持し、ツァドクがソロモンを支持し、最終的にソロモンが王位を継承したので、アビアタルは大祭司職から追放され、エルサレム神殿の大祭司はツァドク家だけになった（王上 2:26）。これによってエルサレム神殿には、カナンの要素が多く取り入れられたように思われる。ディートリヒによると、アドニヤとソロモンの後継者争いは、ユダ的・イスラエルの地方派とカナンの都市派の争いであった<sup>26</sup>。最終的にソロモンが勝利したことによって、ソロモンを支持したカナン人の影響力も大きくなったものと思われる。従って、ダビデ・ソロモン時代は、社会的に宗教的にかなりカナン化されていったと思われる。

さらにショットロフは、都市国家を形成していたカナン人は土地所有の考え方が部族連合時代のイスラエルとは根本的に違っていた、と言う。すなわち、イスラエルにおいては土地は、個々の氏族と家族にできるだけ平等に配分された譲渡不能な相続地（ナハラー）の観念であり、それは相続の場合だけ譲渡することができたが、カナン人は土地所有を自由に譲渡できる商品と考えていた、というのである<sup>27</sup>。そこで、カナン出身の役人は、手段を選ばず自分の土地を増やそうとし、上層のイスラエル人もそれにならったのである。ここに、

25 ヴァルター・ディートリヒ『イスラエルとカナン——二つの社会原理の葛藤——』山我哲雄訳、新地書房、1991年、29-48ページ。

26 ヴァルター・ディートリヒ、前掲書、36ページ。

27 ヴィリー・ショットロフ、前掲書、79ページ。

部族連合時代にはなかった貧富の差の拡大が起こったのである。さらに王国時代に古い自然経済から貨幣経済に移行した。このような状況において、カナン人の商人はいろいろな手段を用いて利潤を追求し、イスラエルの昔からの農民はますます貧しくなっていたのである。

### 4.3. イスラエル王国

ヤロブアム I 世（前 926-907 年）が北イスラエルの王になったとき、エルサレムの聖所に対抗するためにベテルとダンを国家聖所とし、そこに金の子牛を安置した（王上 12:28-29）。そして彼は、レビ人でない者を祭司に任命した（王上 12:31）。この時ヤロブアムは、金の子牛のことを「これがあなたをエジプトから導き上ったあなたの神である」と言っているからヤハウェ以外の神が意図されたのではない。しかし、牛は古代オリエントにおいて広く豊穡神のシンボルとされており、バアル崇拝と容易に結びついたであろう。むしろヤロブアムは、紛らわしい子牛の像を聖所に安置することによって、カナン人との融和を図ったのではなかろうか。いずれにしても北イスラエルの聖所ではヤハウェとバアルとの宗教混交が広く行われていったことはホセアの預言からも推測される。オムリがサマリアを北イスラエルの首都にしたとき、やはりその聖所に金の子牛が置かれたようである（ホセ 8:5-6 参照）。

一方レビ人は、部族連合時代以来のヤハウェ主義者であり、ヤロブアムがレビ人を聖所から追い出したということは、カナン人との融和が考えられる。追放されたレビ人のその後のことははっきりとは分らないが、ヤハウェ主義の伝承を伝えていったと思われる。そして特に預言者にその影響を及ぼしていったであろう。H. W. ヴォルフは、レビ集団とホセアが近い関係にあった、と主張した<sup>28</sup>。

オムリ王朝の時代（前 9 世紀）には、宗教においても経済においてもカナン化が進んだ。それはオムリがフェニキアの諸都市と外交関係を結び、商取引を

---

28 Hns Walter Wolff, *Hoseas geistige Heimat*, *ThLZ* 81 (1956), 83-94.

盛んにしたからである。カナン人は昔から商取引の専門家であり、オムリが彼らを活用したからである。さらにオムリは自分の息子のアハブをシドンの王エトバアルの娘イゼベルと政略結婚させたのである。イゼベルはフェニキアの主神メルカルト（旧約聖書では「バアル」と呼ばれている）を持ち込み、ヤハウエ礼拝者を迫害した。この時、預言者エリヤはバアル宗教と戦い、部族連合時代以来の伝統であるヤハウエ主義を主張した。

カナン化は経済とも密接に関係し、カナン化の進行にともなって上層階級が農民から巧みに土地を取り上げ、大土地経営が行われた。その一つの例は、ナボトのぶどう畑事件である（王上 21 章）。アハブは隣接したナボトのぶどう畑が欲しかったが、「嗣業の土地（נַחֲלָה）を譲ることができない」と断られたとき、渋々それを断念した。それは、イスラエルの古来の土地法を尊重したからであろう。しかし、イゼベルはフェニキアの権力者のやり方に従って、巧妙な手口でナボトの土地を取り上げたのである。カナン人の上層も同じような手口で農民から土地を取り上げていたことが推測される。これに対して、部族連合時代以来のヤハウエの法を守る立場の預言者エリヤは、アハブとイゼベルに対して法違反を非難し<sup>29</sup>、家系の断絶という厳しい裁きを宣告した。

イエフ（前 845-818 年）は、ヤハウエ主義の預言者（エリシャの集団）の支持を得てオムリ王朝を倒し、バアル宗教を一掃した。そのとき協力したのが、やはりヤハウエ主義の集団であったレカブ人であった（王下 9-10 章）。これによってカナン人は痛手を被ったであろう。しかし、アモスの活動したヤロブアムⅡ世の時代には、カナン人の商人たちの活動が再び活発になり、ベテルの国家聖所をはじめ国全体がカナン化されていった。そこで犠牲になったのは、部族連合時代からの伝統を引き継いできた農民たちであった。ドンナーは、サマリアの上層階級は独占的な穀物の商取引に関与し、不正な手段でもって貧しい人々を不利な結果に陥らせた、と言う<sup>30</sup>。ヤロブアムⅡ世の時代、経済的格差

29 この場合は、偽証、殺人、むさぼりという最も重要な法である十戒の規定の3つに違反したのである。

30 H. Donner, *ibid.*, S. 503.

がますます拡大していった。古代以来のイスラエルの法（特に、「契約の書」）に則って、この現実を厳しく非難したのがアモスである。

ホセアは、イスラエルが王制に移行し、王や高官などがカナン化の影響を受け、階層分化が生じた結果、イスラエルの民に格差社会が発展したと見たようである。そこで主には宗教においてカナン化の責任があった祭司を痛烈に批判したのと同時に（4章など）、王や高官（מלך）を批判したのである（7:3-7, 8:4a）。

#### 4.4. ユダ王国

ユダ王国においても、社会的事情は北イスラエルと似た状態であった。イザヤの時代（前8世紀）、カナン人の商人たちはイスラエルの古来の土地法（נַחֲלָה）を無視し、農民から巧みに土地を取り上げ、大土地所有を拡大していた。さらに借金を返せない農民を簡単に債務奴隷にしていた。このような現実に対して、イザヤやミカは貧しい農民の立場に立って、支配者層を痛烈に非難した。

H. ニールは、前733年のティグラト・ピレセルⅢ世の攻撃によって打撃を受けた北イスラエルのカナン人の上層が南ユダに移住し、自分たちの資本を元手に農民から家や土地を取得したため、ユダの農民はますます貧しくなった、と言う<sup>31</sup>。このような事情のもと、イザヤの時代南ユダにおいても経済的格差が拡大したのである。

前述のように、ヨシヤの改革（前622年）において、カナン化を推し進めて経済的な繁栄を得ていた支配者層は大きな痛手を被ったであろう。ヨシヤの改革は、修復中の神殿から見つかった「律法の書」に基づくものであった。この「律法の書」は、申命記の中心部分であったということで意見は一致している。そして申命記の規定は、イスラエルの古い制度の回復が目指されている。J. ブレンキンソップは、申命記は預言者運動の深い影響を受け、職のない祭司（レビ人）や寄留者、孤児、寡婦などの社会における弱い立場の者のための明確な

---

31 H. Nier, *ibid.*, S. 76.



規定を主張している、と言う<sup>32</sup>。すなわち、3年目ごとの10分の1税（14:28-29, 24:17-22, 26:12-15）、7年目ごとの負債の免除（15:1-3）、これの悪用を防ぐ適切な策（15:7-11）、利子の禁止（23:20-21）、酷な担保の禁止（24:6, 10-13, 17）、正しい裁判の執行の主張（16:18-20）など。また、高度な保護の規定、奴隷の解放（15:12-18, 23:16-17, 24:7）、過失による殺人の正しい取り扱い（19:1-13）などである。最も特徴的な規定は、伝統的な農耕の生活様式と自由農民の権利を守ることであり、財産の保護（22:6-7）、境界標識を移すことの禁止（19:14）、軍務の免除の規定（20:5-9, 24:5）、祭司の10分の1税の制限（18:1-8）、祭儀の維持費は個人の収入に応じて支払わねばならなかった（16:16-17）ということである。

しかし、ヨシヤは紀元前609年、改革の半ばに、エジプト王ネコに打ち破られ、命を落としてしまった（王下23:29）。王位を継いだ息子のヨアハズは、ネコによって退位させられ、同じヨシヤの息子のエルヤキムが王に即けられ、名をヨヤキムと改名させられた。この改名は、ファラオのユダに対する統治権を表すものであった。事実ヨヤキム（前608-598年）は、国民に重税を課してネコに朝貢しなければならなかった。さらに、紀元前605年のカルケミシュの戦いにおいて新バビロニア帝国のネブカドネツァルⅡ世がネコに勝利してからは、ユダはこの帝国の属国となり、ヨヤキムはバビロニアに朝貢しなければならなくなった。ヨヤキムの時代、ユダにはエジプトの神々やバビロニアの神々が導入され、それにとまってヨシヤによって取り除かれたバアルなどの偶像も復活したようである。そして、カナン化された指導者層も勢いを回復したようである。エレミヤは、そのような状況において弱者を虐げていた支配者階級を批判した。バビロニアの捕囚の地で活動したエゼキエルも、弱者を虐げるエルサレムの指導者層を非難した。

---

32 J. プレンキンソップ、前掲書、151 ページ。

## 5. 預言者たちの主張

古代イスラエルにおける正典的預言者は、基本的に部族連合時代以来の契約に基づく古い伝統を担ったヤハウェ主義者であった<sup>33</sup>。そして基本的に、この古くからのヤハウェ主義の伝統に反する現実を批判した。彼らは単独で行動したのではなく、同じような伝統に立つヤハウェ主義の支持者がいた。ヤハウェ主義に反するものとしてカナン主義があったであろう。ヴァルター・ディートリヒは、その著『イスラエルとカナン——二つの社会原理の葛藤——』において、イスラエルの歴史を「イスラエル」と「カナン」という真っ向から対立し合う二つの本質的に異なる社会原理の葛藤の経過として見た<sup>34</sup>。ダビデがカナンの都市国家をイスラエルに併合して以来、カナン化の影響により伝統的なヤハウェ主義が脅かされたのである。それは宗教的な影響と経済的な影響があった。宗教的な影響によってヤハウェの礼拝がバアルの礼拝と混交的になっていった。経済的な影響では、カナン人は部族連合時代からのヤハウェの法（とりわけ土地法）を無視して、不正な手段で富を築き、農民が虐げられるという現実が生じた。預言者たちは、このようなカナン化によって脅かされたヤハウェ主義の伝統を守ろうとしたのである。

### 5.1. アモスの主張

E. ヴェルトヴァインは、弱者が虐げられている状況にあって、アモスは貧しい農民の立場に立ち、部族連合時代からの「契約の書」などのイスラエルの古い法に則り、公義（**מִשְׁפָּט**）と正義（**צְדָקָה**）を主張した、と言う<sup>35</sup>。アモ

33 ホセア書 6 章 5 節 a に「それゆえ、わたしは彼らを／預言者たちによって切り倒し／わたしの口の言葉をもって滅ぼす。」とあるが、ここでホセアは、北イスラエルに登場した一連の正典的預言者（アヒヤ、エリヤ、エリシャ、イムラの子ミカヤ、アモス）を思い描いているようである（拙稿「ホセアの預言者理解」、『ヴィア・メディア』第 3 号 [ウイリアムス神学館]、2000 年、6 ページ参照）。

34 ヴァルター・ディートリヒ、前掲書。

35 E. Würthwein, *ibid.*, S. 48.

スは、没落した農民を「正しいもの (צַדִּיק)」と呼ぶ (2:6)。これは、嗣業の土地 (נַחֲלָה) に住む正当な権利を持つ「誓約共同体」の成員としてのイスラエル男子を指す。L. ケーラーによると、この成員は元来、自分の地所を所有し、結婚、祭儀、戦闘、裁判における 4 大権利を所有していた<sup>36</sup>。アモスはこのような正当な権利を持つ自由農民が支配階級の横暴によって債務奴隷に転落させられている現実を告発したのである。アモス書 5 章 24 節に「正義を洪水のように／恵みの業を大河のように／尽きることなく流れさせよ。」とあるが、これがアモスの中心的な主張である。新共同訳ではここで、מִשְׁפָּטを「正義」と צְדָקָהを「恵みの業」と訳しているが、岩波訳や新改訳のように「公義」と「正義」という訳がいいように思える<sup>37</sup>。この公義と正義は、部族連合時代以来の契約に基づく神と人との、人と人との正しい関係を表し、多くの預言者はこれを主張した。

## 5.2. イザヤの主張

アモス同様、イザヤも貧しい農民の立場に立ち部族連合時代以来のヤハウェ主義の伝統に基づいて、公義と正義を主張した (5:7, 16, 9:6, 16:5, 28:17, 32:1, 16, 33:5)。そして、支配者層が弱者を虐げている現実を批判した。1 章 17 節では、「善を行うことを学び／裁きをどこまでも実行して／搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り／やもめの訴えを弁護せよ。」と部族連合時代の法に則って、弱者の保護を主張している。

ただイザヤは、ダビデ・エルサレム伝承をも受けており、ダビデ家とエルサレムの町は神に選ばれたものという確信があったようである。そして、現実のダビデ家の王、エルサレムの町は、本来あるべき公義と正義を失っている、と批判したのである。5 章 7 節では「イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑／主

36 L. ケーラー『ヘブライの人間』池田裕訳、日本基督教団出版局、1970 年、175 ページ。

37 とくに צְדָקָהを「恵みの業」と訳しているのは新共同訳のみで (詩 11:7, イザ 28:17, 46:12, エレ 22:3, エゼ 18:5, ホセ 10:2 など多くの箇所)、ほとんどの訳は「正義」と訳している。

が楽しんで植えられたのはユダの人々。主は裁き（ミシュパト）を待っておられたのに／見よ、流血（ミスパハ）。正義（ツェダカ）を待っておられたのに／見よ、叫喚（ツェアカ）。』と批判している。しかしダビデ家に理想的な王が現れると、「公義」と「正義」をもって統治し、平和を実現すると期待した（9:5-6, 11:1-5）。そして、終末の時にエルサレムから救いが来ると期待した（2:2-5）。

### 5.3. ミカの主張

ミカも部族連合時代以来の古い法（特に土地法）を主張し、それを無視して大土地所有を行っていたカナン人の上層階級を非難した。そして、「公義」を主張した。6章8節には「人よ、何が善であり／主が何を前にお前に求めておられるかは／お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し／へりくだって神と共に歩むこと、これである。」とある。ここで新共同訳で「正義」と訳されている語は、**מִשְׁפָּט**であり、岩波訳では「公義」と訳されている。

### 5.4. ホセアの主張

ホセアの主張は、部族連合時代の契約に基づくヤハウェとイスラエルの関係である。そしてホセアは、当時の偶像礼拝のためにこの契約が破棄され、イスラエルはもはやヤハウェの民ではない（ロ・アンミ）と宣言された、と言う（1:9）。一方ホセアは、イスラエルの民がまだ沃地に入らず、カナンの影響を受けていなかった荒れ野時代を理想化している（9:10）<sup>38</sup>。しかしカナンの沃地に入りカナン化の影響を受け、バアル崇拝によってヤハウェとの契約を破った、と言う<sup>39</sup>。そして大切なのは、「愛（חֶסֶד）」と「神を知ること（יָדַעַת אֱלֹהִים）」だと主張した（6:6）。

38 荒れ野伝承については、拙稿「預言者の荒れ野伝承についての一考察」、『神学研究』第38号、1991年参照。

39 ヤハウェとの契約を破り、偶像崇拝に陥ったのをホセアは「淫行」と表現した（1:2, 2:6, 4:10）。

### 5.5. エレミヤの主張

エレミヤもホセア同様北イスラエルの契約伝承を受け継いでいる。しかしエレミヤの時代、カナン化の影響によって契約を破った、と言う（11:10, 22:9）。そこでエレミヤも部族連合時代以来のヤハウエとイスラエルとの正しい関係である「正義」と「恵みの業」（「公義」と「正義」）を主張した（9:23, 22:3, 23:5）。

### 5.6. エゼキエルの主張

エゼキエルは、第一回捕囚の時に（前 598 年）ヨヤキン王など上層階級と共にバビロンに捕らえ移され、捕囚の地で活動した。彼は、エルサレムが陥落する（前 587 年）までは、主にイスラエルの民（特に上層階級）の罪を告発し、厳しい裁きを宣告した。その罪の主なもの、偶像礼拝（6, 8, 14 章など）と流血である（11, 22, 24 章など）。そして悔い改めを勧め、やはり、「正義」と「恵みの業」を主張した（18:5, 33:11, 45:9）。

## 結び

正典的預言者たちは、大体において古い部族連合時代以来の法と宗教の伝統を守ろうとしたヤハウエ主義者であった。彼らは、とりわけカナン人の（カナン化された）支配者層が多く住んでいた都会（サマリア、エルサレム）が悪の発源地と見、虐げられていた地方の農民の立場に立って批判した。預言者が非難したのは、民全体というよりは、王をはじめとする社会の支配者層や商人たちであった。彼らは古来のイスラエルの法を無視するような手段で富を集積し、贅沢な生活を送っていた。この犠牲になった弱者は、支配者層から暴力的行為を受けた（アモ 3:9-10, 4:1-3, 8:4, ホセ 12:8, ミカ 2:8, 3:10）。G. ヴァンケは、預言者の批判は、絶えずカナン人のないしカナン化された上層階級が古来の農民の社会秩序を破壊し、格差を増大させたことに向けられた、と言う<sup>40</sup>。

---

40 G. Wanke, Zu Grundlagen und Absicht prophetischer Sozialkritik, *KuD* 18(1972), S. 11.

そして預言者たちは、部族連合時代のヤハウエの秩序である「公義 (מִשְׁפָּט)」に基づく社会、およびこの秩序に対応した行為である「正義 (צְדָקָה)」を主張した。そして、公義と正義の踏みにじられた現実に対して、やがてヤハウエによって厳しい裁き（国家滅亡、捕囚）が下されることを宣告したのである。